

批評及び紹介

ケネデ
氏 迦膩色迦研究の秘鍵 (承前)

堀 謙 徳

第二章 迦膩色迦の古銭

上來印度の國王として迦膩色迦を論じたれば、次に支那歐洲の商業史上より之を觀察せんとす。又王の年代は西紀前第一世紀にありとせしが、今迦膩色迦及び其繼承者が鑄造せし古銭を調査し、迦膩色迦を此以外の年代に定むる能はざる理由を證明せんと欲す。先づ迦膩色迦及び其王統の古銭の特色として擧ぐべきもの左の如し。

(一) Kozonó Kadphises は銅貨を鑄造し、其子 Wóna Kadphises は金貨を發行せり。

批評及び紹介

(二) 金貨通用の爲めに西紀前第二世紀の中葉より銀の下落を來し、金一銀十一の比例を以て引換をなせり、貴霜朝に至り金貨更に流通し金一銀十二の比例となれり。

(三) 迦膩色迦は印度以外に領土を有せざれども、王が鑄造せる金貨には希臘文字を專用せり。

(四) 迦膩色迦・フギシユカの二王は錢貨に神名神像を刻し、其種類三十餘に上り、印度・佛教・希臘・パビロニヤ・ゾロアスター諸教の神々を含み、殊にゾロアスター教のもの多し。

(五) 古銭の希臘文字の中には古文字を見る。

此等の古銭は廣く行はれ、北印度を主とし、東はカシヤの流域に及び印度の西方にも通用したり。

今論議を進むるに當り、先づ發端に注意に上るべし。

き三點を列記すべし。

(一)迦膩色迦以前百五十年間の通貨は銀貨及び銅貨なり、グースデーブと同時代なる印度バルシヤ種族の君主並に其以後に出てしマツラーの太守の如きも銀貨銅貨を造り、迦膩色迦の前後の時代には一般に銀銅貨を使用し、錢面に二國語を刻せしが、外國貿易増進するに従ひ、迦膩色迦の世に金貨を鑄造して支拂に供せり。

(二)外國貿易には金貨を專用し錢面に希臘文字を刻し、印度の俗語 (Pakia) を見ず、商業上の取引に従事する者が各別の國語を使用する時は便宜の爲に錢面に二國語を刻すべしと雖も、若し三四の國語混雜する時は狭き錢面に多數の國語を列擧する能はざるが故に、通常一般に廣く行はるゝ仲介語を錢面に刻するもの多し、迦膩色迦の時希臘語が仲介語たりしを以て、王の古錢に希臘文字を見る。

(三)金の豊富なるは迦膩色迦時代に外國貿易が急に

増進せしに由る、是れ西紀前第一世紀の初に支那と西方諸國との交通を生じたる結果なり。

第一節 東西交通史の觀察

(一)支那の西域交通——前漢の初、匈奴強大となりて中央アジヤに據り、西はヒンより東は滿洲に其勢力を及ぼし、屢々支那本部に寇す。武帝は西紀前百二十一年を以て大に匈奴を破り、其本據を覆して之を漠北に追ひ、是より以後二十餘年の戰爭及び外交によりて西域諸國を服して藩屬となせり。西域の民族は皆商業に巧なれば、名を入貢に托して年々使者を支那に送り、以て國産を獻じたれば、支那の朝廷は絹帛其他の貴重品を贈りて使者を返する例とし、事實に於て支那と西域との貿易なりき。西域交通上の通路に南北二道あり、南道は于闐よりヒマラーヤ山系を越へ、カシュミール・ガンダーラ・カブールに達し、北道はカシニユガル・ヤルカンドを経てソグド

バクトリヤに至る。南道は早く開け、西紀前第一世紀に於ける西域の通路となれり。西曆第一世紀には北道開くるに及び、支那の絹帛は南北二道の中何れかを通じて遠くシリヤに入り、更に加工せられて遙に羅馬の市場に達し、婦人及び上流社會に使用せらる、絹帛が始めて羅馬に入りしは實に共和政時代に溯るを以て其輸入の古さを知るべく、Virgil, Horace Propertius の書にも既に支那輸入の絹帛に關する記事あり。支那よりシリヤに至るには二三の通路あり。パーミルより西に向て地中海方面に達する商路は隊商が往來する所にして、隊商は大抵、イラン民族のバクトリヤ人もシリヤ人に限られしが故に此間の通商は此二國人の占むる所なりき。カシムミール・カーブルを經由せし絹帛は一たび波斯灣頭に運ばれ、是より陸路沙漠を横斷し、Palmyra 市を過ぎてシリヤに着するか、或は波斯灣頭より直に水路紅海に入り東岸北端にある Lenke Come 港に着するか、即ち波

批評及び紹介

斯灣より西に於ける交通に水陸の二路あり。當時印度と波斯灣との間に於ける海運通商に従事するものはメセチ (Mesene) の商人なり、此メセチ市は迦賦色迦研究に重要な關係を有する市府なり。
(一) 羅馬の印度通商——西紀前第二世紀の終末に至るまで印度洋の貿易通商に従事する者は印度人アラビヤ人及び波斯灣附近の民族あるのみ、埃及の領主 Ptolemy Philadelphus 竝に Ptolemy Energetes の二王は紅海の西岸に殖民地を設け、之に由てアフリカ内地を開發して通商を進めんことを計りしが、未だ紅海以東に着眼せず、アレキサンドリヤ府の希臘人は西紀前百二十年既に印度直航の航路を開かんと試みたるが、トレミー王は印度通商に冷淡なるが爲に、充分の武力的保護を與へずして功を奏せざりき、ストラポーンの說によれば、紅海を出て、東方アラビヤ海に航行せし船舶は二十隻に達せずといふ (Strabo XVII. p. 798) 當時アラビヤ海方面にはアラビヤ人の

第三卷 (三一)

海賊出沒して通行の商船を掠奪し航路危険なりしが、西紀前三十年オーガスタス帝が埃及を征服するに及びて商業發達し、アラビヤ人の海賊を討伐せし以來印度の通商を行ふに至れり。この時アラビヤ海賊征討の任に當りし埃及太守 Aelius Gallus の軍に従ひしストラポーの所傳によれば西紀前二十五年 Myos-Hormos より印度に航行する船舶百二十隻あるを見たりといへり、以て印度通商の盛大に赴きしを知るに足れり。漢の武帝は陸路西域に通じ、羅馬のオーガスタス帝は海路印度に通じ兩々相對して東西交通の恩人たり。然れどもアラビヤ人は尙ほ Adnan (今の Aden) に據りて屢々商船を襲ひしが、クラウディオゥス帝の世、羅馬の兵は攻めてアダナを陥れ以て印度航路の安全を保證したり、繼てネロ帝の世 レキサンドリヤ印度間の貿易發展し、ブリニーの所傳 (Pliny, XII, 84)によれば、印度・支那・アラビヤより羅馬に輸入する物品頗る多く、年額九百萬圓以上

に達す、而して大部分は奢侈品に屬するを以て羅馬の上流及び婦人が奢侈に走れるを推知すべし (Mo Crindle, Ancient India, p. 126)とす。此中主要なるものは印度よりの輸入品にして、『ヘリッブルス』の所傳にては、印度河口にある Barygaza, Barbarikon の二港より羅馬に輸入するものは絹帛・絹織物にして其額多からずといへば、東洋の絹帛は大部分陸路通商によりて羅馬に入りしならんか。

迦賦色迦の古錢には羅馬の影響なし、次代のフギシユカ王は西曆紀元頃まで生存せしが、鑄造の古錢中には埃及の神 Orapis を刻せるものを見るは確に アレキサンドリヤより輸入せし所に係り、オーガスタスが開きし東洋通商の影響が印度に及べるを明にすべし。西曆第一世紀後半に生存せし Kozanto Kadphises 及び Wema Kadphises の二王も亦羅馬の感化を蒙る、而して迦賦色迦の通貨に察接の關係あるは希臘語希臘文字を使用し、金貨を流通せるパピロ

ニヤの商人なり。

(三) バビロニアの市府と東西交通——西紀前後二三百年間に於ては、バビロニア南部より波斯灣に至るまでの地帯に半獨立の小國數個あり、セレウコスの王國滅びて安息國興るに及びてメセネ(Mesene)即ち後代のIraq Arabi・カラウケテ(Characene)即ち後代のSarvadの二市繁榮に赴く、其外にErymais即ちEla-osia・Parthabに達す、是れ即ち歴山大王及びアンチオキセス三世が印度より歸途通過せし通路なり。當時安息國は北に位し外國交通の商路を妨害せしが、ベルシスは安息國の南に位し、獨立せしを以て、通商の便あり、かくの如くイランの中央高原にある沙漠以南の地は安息の領土に非るが故に、安息國の苛酷なる税關を通過することなく安全に東西の商業交通をなせり。『前漢書』には、カシニ・ミール・カール

の西メセネまでを一國として烏弋山離と名け、其文化・風俗・錢貨は皆屬賓に同じといへり、思うに此地方民族の文物は『前漢書』所傳の如くなるべしと雖も、此地方は一國に非ずして數國に分たれたり。エウフラト・チグリス・カールン(Karun)三河の合流する南部バビロニアの平原は氣候暑濕にして灌漑の便あり、米麥等の穀物を産す、此地方は人口稠密にしてバビロニア文化の生産地たり。スメリヤ人(Sumeri-ite)・チャルデヤ人は久しく波斯灣沿岸の通商を營み時代の經過と共に人種混合し、西曆紀元頃にはセミチックの文化を傳へ、ナバタエ種(Nabatae)の君主を戴き、アラメヤ語(Aramaic)を使用す、此民族は東方に交通移住するに及び、セミチックの文化を傳へて遠くカール河地方に擴がる、ストラポ其他の羅馬地理家がメセネ市をアラビヤの一部とするはナバタエ種の君主を奉ずるを傳へて誤れるものが。此の如く、この地方にはセミチックの文化を有す

ると雖も、希臘人は西紀前第七世紀以來此地域に住し、希臘人の建設せし市府少からず。アラビヤ海の沿岸域に今の波斯の地には希臘に緣故ある *Alexandria* 或は *Seleukia* の名ある市街七八を見るが如き即ち是なり、故に此等の市府が中心となりて四方に希臘語を傳へ、西曆紀元頃一般に通用し、其の全部の中樞はチグリス河畔のセレウキヤ市にして、殊に安息朝時代にありてアジヤに於ける希臘文化の主腦たり。オーガスタス帝の晩年に出てし *Diophys* 及び *Isidore* の二人はメセネ一名カラクス (*Charax*) の人にして希臘語を以て書を著せり、*Charaxene* 市に發行せられし古錢には希臘語を刻し、*Attambelus* I (西紀前二九一西曆五) の時代まで希臘語流行す。

このメセネ・カラケネ兩國の市民は商業殊に運輸仲繼の業に當り水運に巧なりければ、其商船は西は紅海の東岸 *Leuke Coma* より東は印度河の河口に往來し、東洋の貴重品をシリヤ埃及に運搬せしを以て

二市の海運業は埃及のアレキサンドリア港に對立するを得たるが、オーガスタス帝のアジヤ征服以後は復た昔日の繁榮を見ざりき。液運も亦之に劣らず、メセネの人民は隊商を組織して東は *India* 印度に入り、當時カール河畔にセミチック民族の殖民地ありてメセテの隊商を歓迎し、通商貿易の便利を興へたれば、メセテ商民の東方貿易は陸路に於いても多大の利益を得たり。カラケテの王 *Hyspaosines* (西紀前一二四年在位) の古錢は正にバクトリヤ王 *Erydemus* 王 (西紀前二一〇年在位) の錢貨を模造せしものにして、當時メセテ・カラケテ二國とバクトリヤ國と商業上密接の關係ありしを證明するが如き即ち是なり。メセテの人民は東方貿易に従事せしを以て、西紀前第一世紀既に條支國として支那に知らる、班超は甘英に命じて遙に西方諸國を探險せしめ、甘英は西曆九十七年遂にメセテに達せり、「前漢書」西域傳には「烏弋山離國……行可百餘日、乃至條支

國」とし、『後漢書』西域傳には「烏弋山離國、…西南馬行百餘日、至條支國」とするが故に、烏弋山離即ち Herat より條支即ち Mesene まで騎馬行程百餘日を費すといひ、恰もフリニーの所傳に一致せり

(Pliny, Natural history, VI, 138)、メセネは羅馬に Charax Spasinou 或は略して單に Charax (邑里の義、印度語の nagara) といひ、古代より波斯灣頭の商國として知らる、其後テグリス・エウフラト兩河の土砂流れ出でて沖積を成し地形著しく變じたれども、メセテ港は幸に舊狀を存し、長く繁榮の勢を維持せり、其位置は右にテグリス左にエウフラトの兩河を控へ二水が合流して廣き湖水となれる地點にあり。歴山大王遠征の時兵船上下の地點として之を指定し、マケドニヤ人多く之れに留り、市街地域の四分の一に相當する新市街を造り、本國の地名を採りて Pella と稱せり、後世土砂の爲に害を蒙り、アンチオクス三世は市街を改築して Antiocheia と號し、西紀前百

二十四年 Nabatae 種族の君主 Spurines 王は更に永久的建造を施し、ナバタエ朝の首府となせり、是より名を改め、王名に因みて Charax Spasinou、即ち スピタス府といふ。

さて先にメセネの商民が支那に交通するを得るは仲介者たるカトブル地方の移民あるに因るを説けり、今之れを詳述すれば屬賓 (Kashmir)・高附 (Kabul)・烏弋山離 (Arachosia) の三國は實に支那メセネ間の東西交通の仲介たり、『前漢書』西域傳には高附の民を評して「善_ニ賈販、富_ニ於財」といひ、商業に巧なりとし、屬賓の民は實利を重んじ、金銀貨を使用し、烏弋山離も亦金珠に富むといへるが故に、この三國は通商貿易の仲介者たる資格を具備せり、住民は大部分印度人なるもカトブルには希臘人 (Tarshis) 少からず、通用の俗語は印度のブライクリット語にして、西紀前第一世紀には希臘語を以て取引上の商用語となせり、アラコシヤの首府 Alexandropolis

を始め Daneshpuri の如き希臘人の自治市街あり、
 印度 Panjab 及び迦賦色迦の領土には希臘語通
 用し、王の古錢に希臘文守を専用したり、當時商用
 の希臘語は正式の文法に合はざる誤謬ありと雖も、
 誤謬の有無は國語の通用を否定するに足らず。

上來論述する所を約するに、Ajaya の印度以西に
 商業上の二大中心あり、一はセミチック系のアラメ
 ヤ語を使用する Chaldea 方面の人民にして、一は
 印度系の Practrit 語を使用する北印度・Af
gan 方面の人民なり、而して此兩地方には何れも希
 臘人の殖民地ありて、商人の間に希臘語を以て商用
 語とするが故に、希臘語は此二大商業民族の共通語
 なりき。

第二節 貨幣史上迦賦色迦

の古錢

次に進んで波斯灣沿岸の希臘人アラビヤ人と支那

との通商が迦賦色迦古錢の特色を説明するに足るを
 立證せんとす。

(一) 金貨の増加——支那にては前漢武帝の世金銀を
 外國に贈りしことあれども、西域の隊商が支那より
 本國に齎し歸りしは主として絹帛織物なりき。埃及
 のアレキサンドリヤ府より印度に輸入せしは金塊に
 して金貨に非ず又其額も甚だ少し。『ペリプルス』の
 所傳によれば波斯灣方面より印度に金を輸出せしは
 オマナ (Omana)・アポロゴス (Apologos) の二市ある
 のみ、オマナは波斯灣の入口にありてアポロゴスは
 波斯灣頭エウフラト河の附近にあり、アラビヤの金
 は古より有名にして聖書にも見え、夙に希臘・羅馬の
 間に知らる。ストラボンは波斯灣頭 Bahrain 島の對
 岸にある Chaldea の殖民地 Gera に就て
 述べて曰く「Saba (Saba)・Gera 二市の人民は富
 裕にして金銀多く、金銀寶珠を以て居室を裝飾せり」
 (Strabo, XVI, p. 778) と、波斯灣附近より金を輸出せ

りといひ、或は此地方の市街に金の裝飾多きは何れも古より金の産出を以て有名なるアラビヤより輸出せしに因る。

(二)貴霜朝金貨の重量——メセネの商人は金貨を印度に輸入し、バビロニヤに行はるゝ比例によりて銀と引換へたり、金銀引換比例に關する直接の證明法なきも、當時安息朝の下にある希臘人の自治市府にては、貨幣鑄造に際し、一にシリヤの習慣に則れり、而してシリヤ及び羅馬帝國にては西紀前百年より西暦百年に至るまで二百年間金一銀十二を以て引換相場となせり、思うにメセネの商人は此標準に従ひ印度に於て金銀を引換へしならん。『後漢書』西域傳大秦國の條には、

以金銀爲錢、銀錢十當金錢一、與安息天竺交市於海中、利有十倍、

とし、大秦即ちシリヤと印度との交通上より金銀の比例を知らしむ。カニンハム氏はメナンダー王發行

批評及び紹介

のドラクマ (drachma) 銀貨の重量を測りて 148 grains なりとすれば (Cunningham, Coins of the Indo-Soythians, pt. 1, p. 19) 金貨一個の價は其十倍即ち 148 × 10 = 1480 grains の銀に等し、又もし金一銀十二の比例とすれば、1480 grains の銀は 123.33 grains の金と同一の價なるべし。今貴霜朝金貨を重量を測るに左の如し、

圖號	王名	平均重量
2	Wema Kadphises	123.1 grains
11	Kanishka	123.1 ”
25	Huvishka	123.4 ”
21	Vasudeva	123.3 ”
59	四王	123.2 ” 諸平均

之に由て案するに、貴霜朝にては金一銀十の割合とせずして、銀を更に低く認定し、金一銀十二の割合となせり。

次に解決すべき二問題あり、(一)本と金一銀十の

比例なりしが、歴山大王以後に至りて金一銀十二の比例となりたる理由如何、(二)迦膩色迦の金貨と羅馬の金貨との關係如何、是なり、今順次に之を説か

ん。

(三)金銀引換の比例——ヘロドッスの所傳によれば歴山王が定めし幣制は金一銀十三にして、波斯に行はれしダリック(Daric)貨幣にては實際金一銀十三と三分の一に當る(Herodotus, III, 95)、西紀前四百年には金一銀十二となり、西曆三百年には金一銀十となれり(Boeckh, Public economy of Athens, Eng. ed., p. 27)、本と金貨はアジャ及びアマリカに存し金貨はアジャ諸國及び埃及に於て商業取引に用ひられ、初めアジャ在住の希臘人之を使用し尋て希臘本國の商人間にも流通するに至りしが、尙ほ歴山王の時代までは希臘以外に傳らず。西紀前第二世紀の初、羅馬人が希臘及びアジャを領するに及びて事情漸く一變し、殊に西紀前百九十年マグネシヤ(Magnesia)

の戦後羅馬人はシリヤに對して苛重の年貢を課し、西紀前百八十九年エトリヤ(Aetolia)の人民は銀貨のみを以て之を支拂ふこと能はざるを以て貢課全額の三分の二を銀貨にて三分の一を金貨にて支拂へり。羅馬人一たび金貨を納めて以來次第に其輕便貴重なるを知り、年々アジャの屬領より續々金貨を徵收して之を羅馬政府の中央金庫に秘藏し一般人民の間に流通することなからしめられたれば、西紀前九十年羅馬に於て内亂の爆發せんとする際、中央金庫には百六十二萬八百二十九パウンドの重量ある金貨を貯藏せり(Pliny, Natural history, XXXIII, 55)、シリウス・カエザルの時代には更に金貨の増加あり、當時羅馬の貴族はアジャ領の太守となり或はアジャに往來して間接直接にアジャの諸王を保護したれば、諸王は羅馬の貴族に金貨を贈り、羅馬貴族の邸第には金貨を藏する者少からず。西紀前第一世紀の初、金一銀十二の比例となり、以後二百年間繼續す(Hal-

tschi, Griechische und römische Metrologie, 2 Aufl. S. 403). 是より先き歴山王の東征以來金貨通用の區域を擴め、進んで Diodorus, Euthydemus. の時代には中央アジアよりも金を得、次第に金貨を増加せしが、マグネシヤの戦後はアジア諸國の金貨は年々羅馬に吸取せられ、バクトリヤ・印度にある希臘人は漸く金貨の缺乏を感じるに至れり。メナンダー王は銀貨の下落を防がんが爲に重量 134.4 Grains なりし銀貨の實質を増して 148 Grains となしたれども、遂に銀貨の下落を止むること能はらざりし (Cunningham, Coins of the Indo-Seythians, p. 19). 降りて迦賦色迦の時代には金一銀十二の比例となり、王は此割合を以て金貨を鑄造したり。

(四) 羅馬の金貨と迦賦色迦の金貨——迦賦色迦は羅馬の金貨を模して新金貨を鑄造せしや否や、先づ羅馬の貨幣史を案ずるに、セネート (Senate) にては銀銅貨を造り未だ金貨を使用せず、羅馬の將軍がアジ

批評及び紹介

ヤ領の太守として任にあるや、在任地の流行に従ひ、金貨を鑄て地方の支拂殊に士卒の手當を支給したるが、此種の金貨にして殘存するもの古きは西紀前二百七年に溯るを得べし、後羅馬本國に於ても金貨を造り、スラ (Sela) は第一回に一バウンドの三十分の一の重量にて、第二回は一バウンドの三十六分の一の重量にて金貨を發行し、ポムヘイ (Pompey) も一バウンドの三十六分の一にて金貨を造れり、ジュリウス、カエサル が イムペラトル (Imperator) の職に就くや、西紀前四十六年一バウンドの四十分の一即ち八・一八グラムの金貨を鑄造し、之を以て金貨の法定重量となし、廣く之を流通せしめたり。オーガスタス帝は更に進んで、西紀前十五年貨幣鑄造權を帝室に收め、金銀複本位の制を定む、又次第に金貨の重量を減じ一バウンドの四十二分の一までに至らしめ、帝の世に貨幣の重量屢々變動したり、是より先き西紀前二十七年までは金貨の重量は平均七・九五

グラム、少くとも七・八五グラムあり、其後次第に下りて七・八〇グラムとなれり、西暦六十年ネロ帝は一パウンドの四十五分の一即七・四〇グラムとし、以後後之に則る、トラジャン帝は金の單本位と定めたるも、其以後金貨の重量復た減じ金銀複本位の法定引換を維持すること能はず、甚しく貨幣制度の紊亂を來せり (Hultsch, Metrologie, p. 304-18.)

上來論述する所を簡約して左の三項となすを得べし、

(イ)羅馬の金貨は西紀前四十七年の輸入期より西暦六十年までに屢々重量の變化ありて、一二六グレンより一一五グレンまで上下せりと雖も、貴霜朝金貨の標準重量一二三・三グレンに近似することなりき。

(ロ)ネロ帝以前の羅馬金貨は重量多く金貨貴ければ次第に秘藏せられて通用せざるに至り、ネロ帝及其以後の發行に係る醜惡の金貨多く使用せらる、We-

ma Kadphises は第一世紀の後半にあけしが故に、貴霜朝に於て王が始めて金貨を造り専ら羅馬の金貨を模せりとすれば、オーガスタス帝の金貨に依らずしてネロ帝の金貨に則りしならん、故にウェー・マ・カドファイセス王は始めて羅馬の金貨を貴霜王國に輸入せし人に非ず。

(ハ)貴霜朝歴代の金貨は重量同一にして百三十年間毫も變化なし、是れ金銀の比例不變なる時代に於て見るべき現象なり、而して金銀比例の不變なるは西紀前百年より西暦百年までの二百年間にあり、此以後は銀の價下落し、貴霜朝に於ても金銀の比例著しく變じ銀の下落を示したるならん。

以上の三個條によりて察するに、迦膩色迦の金貨はジュリウス・カエサル以前にあり、本と貴霜朝の錢貨はマケドニヤ朝の錢貨に則り、金貨の重量は當時の市場に於ける金の相場に依りて之を定めたり、カエサル時代まではマケドニヤの Philippos 金貨を羅馬

の商業に使用したるが、貴霜朝の諸王は之に則れるが如し、この金貨はメセネの商人が輸入せし所に係り、西部アジヤに行はるゝ金銀の比例に基き、金銀貨の引換をなせり。翻て迦膩色迦の金貨を見るに、波斯のアケイメネス朝・マケドニヤ朝の如きは何れも金貨を造り或は之を通用せしめれば、迦膩色迦も亦金貨を鑄て此等諸朝の例に従へり。又 Kozoulo Kadphises は金貨を造らざれども、Wema Kadphises は迦膩色迦の先例を追ふて金貨を發行したり、北印度バンジャープは貴霜王國の屬領にして吐火羅（大月氏）の太守が監治せし地なれば別に貨幣を發行せず、北印度の太守が獨立して國王となるに及び新に金貨を造りしが、當時希臘語の知識缺乏し拙劣なる模倣となれり。

抑金貨の鑄造は君主の主權を表示せり、この思想は波斯のアケイメネス朝に興り、アジヤの希臘人及び羅馬に傳はりて一般の習慣となり、遂に羅馬歴代

帝王の特權となれり。印度にありては貴霜・グプタ（Gupta）二朝の如き王權の強大なる時代に於て美麗なる金貨を鑄造せり Kozoulo Kadphises の銅貨にはカロシユタイ文字（Kharosthi）にて Yavugasa 又は Yavasa の稱號を刻し希臘文字にて ZAOPY と刻せり、Yavugasa は Yavuga の物主格、Yavasa は Yavuga の物主格にして Yavuga, Yavuga はインド民族の官名 jagu（或は Zabu とすべし）の變音なれば、首領・大名の類をいひ、至上の主權を有する帝王に非ず。Wema Kadphises は金貨を造り、刻文にはカロシユタイ文字にて Maharia（大王）Rajataria（諸王の王）と號し、希臘文字にて BAQIAEVO BACTIAEON QWTHP MEFAO の尊號を稱し、諸王に王たるの意を示し威權の強大なるを表せり。

第三節 迦膩色迦の古錢と宗教

迦膩色迦・フンギジュカニ王の古錢に種々の神像を

刻す、是れ**バビロニヤ・メセネ**の地方より傳へし所に係る、全體貴霜朝には一代毎に希臘の要素を減ずること迦膩色迦以後の古錢に見ゆ、迦王の古錢には Helios, Salene 等の諸神を刻せるも、月神 Solano は希臘本來の宗教にては女神なり、而して**バビロニヤ**の月神 Sin は男神なるを以て、**バビロニヤ**の月神に希臘の神名を冠して茲に男神の Salene として王の古錢に刻せしが如し。ラギシユカ王の古錢にヘラクレス神 (Herakles) を刻するものあり、而してヘラクレスは**バビロニヤ**の希臘市街に好んで尊信せられて Characene 市發行の銀貨には屢々此神像を刻するを見る。迦膩色迦・フギシユカ二王の古錢には日神ミ斯拉 (Mithra)・月神マオ (Maon) の神像あり、二神はイラン民族の神にして、其他イラン地方より輸入せし地空水火の神あり、フギシユカ王の古錢には埃及より傳來せし Sarapo (Serapis) 神を有し、迦王の金貨には釋迦牟尼佛 (ZAKAMANA BODDO) の刻文と佛

像を有するものあり。

現今黑海より滿洲に至るまで諸地に散在するトルコ民族の蠻民が劣等の宗教を奉ずるが如く、支那甘肅省の西部より西方に移住せし大月氏種族は本と劣等の宗教を信じたるが、西方の文化に接觸するに及んで其威化を蒙れり、當時恰も佛教興隆の機運に際したれば、大月氏の貴霜朝は之を採用して信仰せり。吐火羅 (大月氏) の人民はゾロアスター教徒にあらず、北印度バンジャープにもゾロアスター教徒多からず、カーブル地方にも多數の同教者ありしも完全なる根據を有せざれば、迦王の古錢にゾロアスター教の諸神を刻するは、王の直轄の領地に同教の隆盛なりし證據とならずして、反て西方メセネ地方の古錢を模倣したる理由によりてメセネ地方に同教の繁榮なりし事實を證明するに足るべし。又バクトリヤの同教とも密接の關係ありとも斷言すべからず、殊に王の古錢にあるゾロアスター教の諸神は舊式に屬

し、正統のゾロアスター教の主神にあらず、正統派の主神はアフラマズダ (Ahura Mazda) にして、火を崇拜すと雖も、迦王の古錢には一としてアフラマズダ神を刻せしものを見ず、月神マオの如きもゾロアスター教にては既に隠れて表面に現はれず (Title, *Outlines of the history of ancient religions*, p. 171) されば迦王の古錢に見ゆる諸神は**バビロニヤ・メセネ**の方面より傳へしことを認定するに足れり。

迦王の古錢に見ゆる宗教に就て注意すべき諸條を列擧すること左の如し。

(一) 拆衷主義——**バビロニヤ**は數百年間宗教上の拆衷主義を行ひ、殊に西紀前後には其傾向甚だ盛なり、**アッカディヤ (Akkadia)**の神は**バビロニヤ**に入りてセミチック風となり、更に**イラン**に入りて變形したり、**迦王時代のバルシヤ國はチグリス河畔 (Chaldea)**に都し、人民は屍を丘上に野葬し、空水等の五大を崇拜す、この五大の崇拜は**ダリウス・クセルクセス**

二王時代に見ゆる所なり、**Chaldean** 諸王の古錢には**バビロニヤ**舊來の諸神 **Sin, Bel** 等、**波斯の Sogdomances, Apodaces** 諸神、**アッシリヤの Binega** 神、**ナバタエ種族の Maan** 神、**アラメヤ種族の Theouages** 神の如き種々の神像を刻し、諸民族の神を混淆せり、是れ**バビロニヤ**本來の拆衷主義によるなり。

(二) 星辰崇拜——迦王の古錢には日月星辰の諸神を刻せり、さて**バビロニヤ**は星辰崇拜の本源地にして其慣習に隣邦アラビヤに擴がる、**アッカディヤ**時代に於て既に星辰を崇拜し之を某々の神に合一せしめ、以て**チャルデヤ**時代に及べり、日神の **Sama**、月神 **Sin**、曉の明星神 **Ishtar**、火星神 **Marduk**、土星神 **Nergal** 等の如き是なり。然るに迦王の古錢は**バビロニヤ**の感化を蒙りて日月星辰の神像を有す。

(三) **ナナイヤ**神——**メスネ**の商民は一般**バビロニヤ**の諸神の外に土着の**ナナイヤ**神 (**Nanaia**) を迦王の領土に示し、迦王の古錢には**ナナイヤ**神を刻するもの

あり、この神はバビロニアにも崇拜せられ、ササニ
デ朝の波斯にも信奉せらる。

(四) 希臘古文字 𐤁𐤁 — メセネより希臘古文字を迦
王の領土に傳へたり、迦王の古錢に 𐤁 の字ありて學
者其解釋に苦む、スタイン博士は之を研究し sh の音
を表し、ドリヤ語の破裂音の 𐤁 なりと認めたり (Tro-
dian Antiquary, XXVIII, p. 97)。伯林博物館に存する Ch-
araene の古錢にも見る、其年代は西曆第二世紀の中
葉にして希臘語の使用殆んど中絶せんとする時代の
ものなり。サレット氏は此種類の標本三個を見たる
に、BAC OPABZ の王名を刻し、458, 460, 478 (A.
D. 146—66) の年號あり、サレット氏は王名を (Ora-
bazis とすれども、スタイン氏の新解釋を應用すれ
ば王名は Oshabazis なるべし、此の如く Charaene
の古錢に迦王の古錢と同一の 𐤁 の字あり、故に迦王
古錢の古文字は之をカラケネ地方より傳へ、カラケ
ネには西曆第二世紀まで尙ほ之を遺存せしものな

り。ドリヤ方語の希臘古文字がバビロニアに入りし
順序如何、歴山王の東征以前、希臘の商人が夙にバ
ビロニアに入り、或は戰爭の際捕虜となりてバビロ
ニアに留りし者あり、古きは西紀前第七世紀に溯る
を得べし、此等の希臘人の中にはドリヤ方語を使用
する南部希臘の人民も加りしならん、彼等は古風の
文字をバビロニアに傳へ、久しく遺存せしに非るか、
固より著者の想像に屬すと雖も、或は當れる説たる
べきか、何れにしても、迦王古錢の字母がバビロニ
ヤのカラケネ地方に知られしことは動かすべからざ
る事實なりとす。

第三章 迦賦色迦王と東洋に

於ける希臘の感化

西曆紀元の頃まで希臘種族のヤブナ人はカイブル
を領し、西曆二三十年の頃アラコシヤにあるアレキ
サンドロポリスは希臘人の自治市街として存在した

り、今もしカーブル・アラコシヤ方面に於ける希臘人勢力の衰滅せし年代を知らば迦王の年代に關する晩年の界限を明にすることを得べし。

(一)蠻民の侵入——本とアジャの希臘市府が繁榮に赴きしは西方に於ける希臘文化の本源地と常に連絡を維持せしに由ること既に述べし所なるが、中央アジャの蠻民が南下侵入するに及び、東方にある希臘人は本地との連絡を失ひ、孤立の状態に陥り、次第に衰頽に赴けり。エウティデムス (Euthydemus) がアンティオクス三世に告げたる意見によれば、バクトリヤ王國にして北方より進入せる蠻民の爲に滅する時は、其結果としてエウティデムスもアンティオクス三世も共に從來の國勢を維持すべからず、各自其領土が蠻民の勢力の下に必ず退化するの恐ありと、以て當時の狀勢を推知するに足る。其後バルシヤ人の獨立、スキタエ人の侵入ありて、セレウコス統の希臘種の王國、バクトリヤの希臘種の王國は滅

亡したるも、パピロニヤ・メソポタミヤには希臘人の自治市街殘存し、カーブルには希臘種の小侯伯ありて幾分か餘勢を有せしが、西方の本地より新に移住する希臘人なく、前代の惰力によりて存立するに過ぎず。安息朝の盛時には大に希臘風を輸入し、朝廷の官吏に希臘語を解する者多く、オロデス王 (Orodes、西紀前五七一三七在位) の如きは希臘劇の公開を許し之を保護したり。西曆第一世紀にはバルシヤの國內分裂して内亂を生じ、第一世紀の初には希臘種の侯伯カーブルに亡ぶ、此時期より以來古錢の希臘文字も著しく退化するを見るは明に北方蠻民の南進を立證するものにして、當時東方希臘文化の中心たるセレウキヤ府衰滅の事情は略一般の形勢を察知せしむるに足るべし。

(二)セレウキヤ府の衰滅と希臘語の減退——西曆三十六年より四十三年までの間にバルシヤ獨立してセレウキヤ府を中心とする希臘人の勢威衰へ、西曆白

十七年羅馬のトラジャン帝はセレウキヤ府を伐ち、百六十五年羅馬の將軍は撃て之を焼けり、唯だ對岸の Oesiphon のみは舊狀を存せしが、百九十八年羅馬の將 Septimius Severus は攻めてクレシフォン府を毀ち、僅に市外の Cochie 村を残しネストル派の僧侶が集會の地となれり。トラジャン帝の討伐以前蠻民既にセレウキヤ府に入り來り、府民の全人口六十萬の中に少數の希臘人あるに過ぎず、嘗て市會議員三百名を撰ぶに當り、大多數は外人又は混血兒の裔にして純粹の希臘種は僅に一部の少數に止まれり。降りて安息の Gotarzes (A. D. 41-51) 及び其對抗者 Vardanes I (A. D. 41-45) の古錢の如きは或は希臘文字に誤謬少からず或は殆んど希臘文字を見ず、ゴタルゼス王の繼承者 Volageses I (A. D. 51-78) の古錢には希臘語と自國語を許用し、トラジャン帝のセレウキヤ府攻撃以後は古錢に二語を並用し、西曆第二世紀の末には古錢の希臘文字全く野蠻化して著しく希臘

の感化が衰へたるを示せり。

此大勢力はセレウキヤ府に止らず、廣く四隣の地方に及び、メセネにはイシドル等の文章家を出したるまでに希臘語行はれ、Atambelus I (29 B. C.-A. D. 5) の古錢にある希臘語は尙ほ正確なれども Atambelus II (A. D. 51-60) の古錢は僅に之を讀むを得るに止まり、其退化を表し、Theoumesses (A. D. 109-115) の古錢に至りては希臘語の文字語法共に退化し、Oslabazes (A. D. 146-166) の古錢に至りては全く蠻風を帯び、西曆百三十八年以後は古錢にアラメヤ語の刻文を有し、希臘文字は單に裝飾たるのみ。安息朝にても Mithridates IV (cir. A. D. 130-147) の治世以來古錢にアラメヤ語を刻し、パピロニア南部及びカラゲネに於ては西曆百二十五年以後は古錢に希臘文字を廢し、一般に希臘語を活用することなかり。

(三) ヤブナ種族の衰滅と希臘語の減退——ヤブナ種

族の希臘人は西印度に入り進んでマツラト市ジャム
ナー河に及べり雖も、其中心は二方面にありて、一
はRawal Pindi 地方・カーブル・アラコシヤにして、
一はKashāwar 半島・印度河下流地方にあり、西紀
前第一世紀の末、希臘人の侯伯がカーブルを領し、
又一方には印度河々口附近を有し、印度バルシヤ種
族が之を滅すまで存立したり。西暦元年より五十年
頃まで此等の地方を占有せし印度バルシヤ種族の侯
伯が發行せし古錢の希臘語は正確なり。丘就却の同
盟たる Hermans は最後のカーブル侯伯なるが、其
容貌は純粹の希臘人に非ずして外人の血統を混ざる
の疑あり、ヤヅナ種族は本と純粹なる希臘人に非ず
して多少混血し、混血の程度少きものを白ヤヅナと
稱し、混血の程度多きものを黒ヤヅナと名けて之を
別てり、カーブルのヤバナ種族は西暦第一世紀の中
葉まで西方の本地と連絡せしが、其後連絡を失ひ、遂
に滅亡せり。ヤヅナ種族の領主は此の如く滅亡せり

批評及び紹介

と雖も希臘語のみは遺存し、印度バルシヤ侯伯 Por
zolio Kadphes, Wema Kadphises 古錢にカロンニテ
イー語と希臘語とを並用するは尙ほ希臘語が解せら
るゝ證據にして、此等古錢の年代は第一世紀の末、
第二世紀の初までに及ぶが故に、希臘語の行はれし
年代も略推知するに足るべし。

次に北印度に行はれし希臘語の衰退を見るに、『ペ
リプルス』の著者は西暦八十年と百年との間に於て
印度に至り、甘英は西暦九十七年、印度・カーブル・ア
ラコシヤを過ぎてメセネに至り、トレミーが埃及の
アレキサンドリア府にて傳へし印度事情を記録せし
は第二世紀の中葉にあり、然るに三人の記録を見る
に、『ペリプルス』には他の地方に希臘語の行はるゝ
を説くに拘らず、當時印度に希臘語の通用するを説
かず、此等の事實より推すに、西暦第二世紀の初に
於て既に希臘語は北印度に消失せしものゝ如し、迦
膩色迦及其王統が第二世紀に北印度に君臨せりとす

れば、迦王以下の古錢に明瞭なる希臘語を見る理由を説明する能はざるべし、されば迦賦色迦の年代を西曆前第一世紀とする著者の見解は蓋し正當なる定説なりといふべし。

結論

上來三章に互りて迦賦色迦を論じて同一の結論に達せり、此際吾人の注意に上れる事實を擧ぐることに左の如し。

- (一) ヤブナ種族がカーブルを領せしとき貴霜朝は北印度に主たり。
- (二) 貴霜朝は西曆第一世紀中葉に於ける丘就却のカーブル征服以前既に印度に存せり。
- (三) 古錢研究上より之を見るに、西紀前第一世紀に行はれし印度・波斯灣沿岸間の絹帛貿易は迦賦色迦の古錢と密接の關係あり。
- (四) 西曆第二世紀、北印度に希臘語の行はれし證據

なし。

(五) Wana Kadphises の時代よりグプタ朝の頃まで吐火羅の太守は北印度を監領し、後バクトリヤの吐火羅より分離して獨立したり。

更に迦賦色迦を西紀前第一世紀の在世とするが爲に容易に解決せらるゝ事實を整列すること左の如し。

- (一) 北印度其他に於けるメナダー王 (Menander) の舊領は分裂して希臘及びスキト兩民族の君主を戴ける小國となる。
- (二) この分裂に當り北印度バンジャープ及び印度河上流の流域は迦賦色迦之を領有す。
- (三) 迦賦色迦の王統が勢力を失ふに及び、印度バルシャ竝にシャカ (Shaka) 兩民族侵入し來りて迦王舊領の大部分を分領す。
- (四) カーブルに於ける希臘侯伯の滅亡。
- (五) 丘就却・閻膏珍のカーブル・バンジャープ征服。

(完)